
今夜、音の無い街に立ち止まって

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今夜、音の無い街に立ち止まって

【Nコード】

N9296A

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

詩です。静かで涼しい夏の夜と、わたしと星と。夢と現実はいつだって曖昧で、だけどそれでもよくて。

彼方ノ星ヨリノ使者

わたしの家から程近い駅はあまり需要がなかった。

無策な都市計画で建設された高いビルとマンションはいつでも一ミリも表情を変えずに佇んでいる。

夜中に家をでてみると、涼しいビル風が街に舞っていた。

この風に乗って、空を飛べそうだ。

そんなこと考えて薄い街灯の中を歩いてみる。

わたしの足音のみが街に放り出されては消えていった。

季節外れの雪。

違う、あれは星。

見上げた空にそれを見付けたときには足が止まっていた。

風が吹ク、薄イ光、音ノ無イ。

その全てがわたしを別世界に誘うように程よい割合でわたしを取り巻いた。

呆然と立ち尽くすと星とわたし、世界はそれだけになってしまった気がした。

何万光年も離れたわたしと星が、一つに繋がる。

周りのビルはきつとわたしより無力だ。

風が飛ばしてくれるなら、わたしはいつでも見つめた先の星に触れられる。

あの星からは地球が見えるのだろうか。

月光ノ調べハ撥ネル様二

綺麗な歌が無音の世界のわたしの胸に鳴り響く。

―君が太陽なら僕の奏でる音楽は夜空だ。

誰かの声はそう笑う。

―それって悲しいこと。

わたしは呟いてみる。

全部は本当に無い、わたしの心の中の会話だけど。

目覚メハ光、闇ハ力トイウコト。

結局わたしが次に気がつくところ家は家だった。

夜はもう明けている。

星の代わりに太陽があくびをしている。

おはよう。

世界の始まりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296a/>

今夜、音の無い街に立ち止まって

2010年12月31日20時36分発行